
これが正しき英雄譚

少雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが正しき英雄譚

【Nコード】

N7647J

【作者名】

少雨

【あらすじ】

誰もが正しいと思うから間違いであり、間違いであるからこそ正義 そんなものを目指して書いていこうと思います。 更新1
00%不定期 正直2話のネタが書きたかっただけ。とか言いつつ何故か毎日更新の既に7話そして10話ぐらいまでネタがあるという謎。なるようにしかならんさー

更新完了2/21

破滅主義（前書き）

数百文字↪千文字強ぐらいを目安に書こつと思います

破滅主義

世界を恨み世界を呪い
世界に絶望したかこそ

死にたがりで

だから死にたくて

死んだ後が怖いから何かを残したくて

故に人を助けて回り

故に多くの人々に後ろ指を指されながら

自分の足跡を色んな所につけて回る

「私はここに居たのだと」

その為に生死の境に立つ事を喜び

自らの痛みを死の予兆として笑う

助かった喜びを浮かべる者に偽善の笑みを浮かべ

誰かの代わりに恨みを自らが死ぬ為に喜んで買う

自らが災厄を振りまき

自らが喜んでそれを刈取る

なんて言う矛盾。 なんていう無意味な行為の繰り返し

命を救うために命を危険に晒し、晒した命の為により大きな悲劇が
巻き起こる

何もしないことこそが一番な事だと知りながらそれでも

私は今日も人を救い
死にたがる。

私は誰かって？ふむ、名乗るべきなのだろうが名は覚えてくれなくて結構。それを知るのは私の本質を見た者こそが相応しい。
故に私が一般的に呼ばれる名前。否、これは職業と言うべきだろう。
なにせ世界で現在1人しかかなれない夢の職業なのだから、皆期待して聞いてくれるかな？では名乗ろう

私の名前は「勇者」

そうこの世界にたった1人しか居ない魔王を倒した伝説さ

破滅主義（後書き）

特になし

とある証言（前書き）

一応こちらアメリカであつた実話のパロディです。

シユールに感じていただければ幸いです。

が裏づけが見つからないと言つ落ちオワタ

とある証言

23 / 8 / 217

んあ？なんで今日も酒場に飲みに着てるのかって？決まってるじゃねえかモンスターのクソヤロウのせいだよ。

この間東の街道沿いにモンスターが住み着いてしまったって話があっただろうが？

そうそう。偶々近くの町にいた勇者様一向が討伐に出向いてくれたってやつだよ。

そうだなー。ご一行があこの辺りにいた危険種のモンスターを殆ど討伐してくれたお陰で最近はこの辺りでモンスターによる被害は

は聞かなくなつたよなー。しかも街道をが安全になつたお陰で

街道通つてお宅らみたいな行商の商人達が数多く木の買い付けやら薬草の買い付けに来てくれるから

この村の連中は一日中必死に皆汗流して働いてるな。

ならなんで樵の俺が働かずに酒場に朝っぱらから籠ってるのかって？

肉食のモンスターが粗方殺された事で最近草食のモンスターが増えちまってな？

木の実を食べるラットリスキーやら水辺の草を好んで食べるラドウエンなんか森で大繁殖しまつててな

丁度今頃ってあいつらの繁殖期なのさ。恋路を邪魔するやつは馬にけられてしんじまえ？ってかwラドウエンだけに笑えないなw

お陰で何処もかしこも気の立ったモンスターが痴話喧嘩ってわけさ。しかもよ？そいつらの住んでる木でも切り倒して見る、怒ったあいつ等に襲われちまうぜ？

全くたまったもんじゃないお陰で樵の連中は2〜3日前から休業さまあ既に今年切った木が去年の2倍以上あるから後は毎日酒飲んで今年は過ごせるからいいんだけどな

おお、噂をすれば今村で一番はたらき物のハンター様じゃないか

ようどうだ今日の狩は？え？大獵じゃなかったからてめえの食ってるラットリスキーの唐揚げ

大盛りで出て無いだろうがって？そりゃごもつとも

狩の調子はどうなんだい？樵の身としちやさつさと草食モンスターを狩って仕事を再開させてほしいもんなんだがね？

なに入れ食い状態？餌と罨さえあればだれでもハンターになれる？そりゃ景気の良い話だ

俺もハンターに転職してみるかどうかどうせ樵の仕事も暫くはお休みだしな

マスター酒3つ追加だゝ

ん？なんで3つかって？そりゃ同席のよしみだ飲んでいきな。何？仕事があるから？こんなけ仕事も余ってる状態でそんなセコセコ

働かなくてもいいだろう？俺のおごりだじゃんじゃん飲みな！

そんなこんなで、その日は夜遅くまで皆で騒いだ。この暗いご時世にこんなに馬鹿みたいに騒いだのは久しぶりだ。

またいつかこの町に戻ってきて皆で酒を飲める日を楽しみに私はこの町を後にした。

・
・
・

18 / 3 / 219

私は約1年半ぶりにあの町を目指していた。又寄ろうと言いながら国外の商談の為国を離れていたから実に久しぶりのこの国だ

おいそこの商人どこにいくんだ？

ん？このまま東に行く？なら出口はこつちじゃないぞ？

南から森を大きく迂回していくんだ。

え？東の街道はどうしたのかって？ああなるほどお宅はこの辺りに来るのは久しぶりなんだな？

東の街道は今は通行止めだよ。東にあった村に行きたい？やめときな今やあそこは化け物の巣窟だぜ

なにがあつたかって？モンスターだよ。信じられない量のモンスターが集まって来て村も森も何もかも飲み込んだ

いまやこの町の東はモンスターの森と呼ばれているだけ？なに東の村人はどうしたか？皆死んだだろうなにせ軍隊が駐留してた

この町ですら住民の6割が食われちゃったんだから

まったく静かな森が1ヶ月もしない間に化け物どもの巣になっちゃったんだ。魔王も死んだのに中々世界は平和にならないな

おすまん仕事があるんでこれで失礼する。くれぐれも間違っても東の街道にはいくなよ？

今では村のあった場所がモンスターの巣になってるらしく騎士団が何度か討伐に失敗してる危険地帯だからな

じゃあな。

私はただただ呆然とその場に立ち尽くすことしか出来なかった

とある証言（後書き）

小学生の頃自分が読んだ本の中に書かれていた

生態系バランスに関するの実例

を唐突に思い出し書いた一品

内容はこうです

1960年代アメリカコロラド州（州名うる覚え）で天然記念物（確か鹿の一種）の保全が叫ばれ州法律で天然記念物を襲う動物 即ちピューマ狩りが行われました。

それにより絶滅危惧種は僅か10年で20000頭から40000頭（数字うる覚え確か倍に）に増え成功を収めたかに見えました。がそこで起こったのは食糧問題でした。鹿が餌にするのは木の皮、草、などですが元々コロラド州は砂漠に近い場所にあり草木の繁殖には余り向いているとはいえない土地柄です。あつという間に草は無くなり木は頻繁に皮を食われることにより倒れ次々と食料の生産能力は衰えていきました。

人間が10年後気がついたときには40000頭いた鹿は僅かに400頭にまで激減

ここにめでたく天然記念物は絶滅危惧種に昇格してこの話はおしましです

さて鹿を人間に例えると公園は地球になるんでしょうかね？歴史は繰り返す？

聖女の日記（前書き）

色々失敗でも気にしたらだめ

聖女の日記

天におわす父なる神よ願わくば救われぬ羊達に救いの手を

2日前私達はこの王都で追われてた子供を助けました。その子は酷く怯えていて、話を聞くどころでは無かったので宿まで連れて返りました。私は全く気がつかなかったのですが何人か途中から追っ手が居たらしく途中で急に居なくなられた勇者さまが追っ手を全て捕まえて兵士達に引き渡されたそうです。

宿に戻りその子を抱きしめてあげると落ち着いたのか、その子はスヤスヤと子供らしい無邪気な顔で眠りに着きました。私も思わず一緒に眠ってしまったのは内緒です。その子が起きて落ち着き話を始めてくれたのが夕方でした。

内容は「人身売買」

なんとこの王都で神の御名において禁止されている行為が行われていたなんて……。勇者様は直ぐにこの人身売買を阻止すると決断を下されました。ああ素晴らしい英断です。神の御名においてこの私も聖女の2つ名をもって全力でお手伝いさせていただきます。オークションが行われるのは明日と言う事で早速作戦会議が開かれましたあ

採用された作戦は簡単で囹と本命の2つに分かれて私達は囹で城門のそばの宿で戦士と一緒に目立つように待機して居るというものでした。勇者様は魔術師と一緒に子供を連れてこっそり組織のアジトを探られるそうです。私はこの組み分けに最初は反対しました。

まず、この魔術師が信用できない事です。魔王を退治した後、ふ

らつと勇者様が連れてきた男なのですが魔の気配がするのです。勇者さまが信用できるというので一緒に居ますが、基本的に私はこの男が嫌いです。賢者様がいればこんな男用済みなのですが、賢者様は念願の後進を育てる事が出来ると魔術学園の学園長として敏腕を振るわれているそうなのでしかたがありません。

ですが、結局隠密作戦に知名度の高い私には難しいとして勇者さまに説得されてしまいました。決して頭を撫でられたからではないんですからね！うう・・思い出すだけで恥かしい。

翌日の朝から、私と戦士は城のすぐ傍の喫茶店でお茶をしています。彼女との会話は楽しいのですがナンパというのでしょうか？男の人が次から次から声を掛けてくるので会話を楽しんでいるところではなくってしまいました。場所を変えようにもここを待機場所として待っていると連絡してしまつた以上動くわけにも行かずに延々と次々やってくる方に彼女がお断りする作業になつてしまいました。中には私に話しかけて来られる方も居りましたが神の愛をといて差し上げようとするのを戦士さまに止められてしまいました。「神の代行者である勇者様に永遠の愛捧げた聖女である私を軽々しく口説こうとするなんて言語道断」と神の罰を下して差し上げようとしたのですが残念です。

何だかんだで夕方になると魔術師が1人で喫茶店に入ってきました。その隣には勇者様もあの子供もいません。物凄く不安に私は襲われ魔術師に問い詰めました。すると「相手を調べる為に勇者様は相手に捕まられた」とこの魔術師は言います。思わずこの魔術師を殺そうとしたのですが、残念ながら殺せませんでした。魔術師無勢が神の一撃を弾くなど言語道断なのです。これも私の不徳のいたる所もつと神の為に勇者さまの為に精進しなくてはいけません。

戦士に諫められ魔術師に勇者さまの伝言を尋ねる「勇者を襲い人質を取って勇者さまを連れて行かれた。その者達は魔王の残党らしきものらしい。それを王と神官庁に告げ王宮騎士団と神殿騎士を私の居る位置まで急行させて欲しい」との事で私達はすぐさま王宮にいき王と神官長を呼びだしてこの伝言を伝えました。直に神殿騎士と王宮騎士の動員がおこなわれ私達は第一陣共に勇者さまの元へ駆けつけました。聖女である私には勇者さまの位置がどんなに離れていても判るので道に迷う事ありません。

駆けつけた先で勇者様は子供達や奴隷達を守り手傷を負われながらも神の御名を汚す者達を全て打ち倒されていました。誰も殺されていない事に私は深い深い感動を覚えながら勇者様の手当てをしました。やはり勇者様は素晴らしい。

今日、昨日あの場所で捕まった人間は魔王の手先として一族郎党に至るまで捕まり、昨日あの場所で捕まった人間は1人残らず簡易裁判で晒し首が決まり執行されました。中にはこの国の高位貴族や高位神官それに大富豪に王族までも居たらしく最初は大いに刑罰は揉めました。が勿論勇者様に剣を向けた魔王の手先を庇うのですかと尋ねると刑の執行が決まりました。助けられた子供達や奴隷だった者達は当然この国の神殿が面倒を見るそうです。「神の御名を崇める者決して人を見捨てて事なかれ。」神のお言葉は人の為にあります。

今回も良い事をしました。良い事をした後は気持ちがいいます。明日がより良い日であります様に

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。
我が王子の恨みいずれ晴
らしてくれ

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。
我が子の恨みいずれ晴らし
てくれる

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。
我が一族の恨みいずれ晴ら
してくれ

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。
我らの恨みいずれ晴らして
くれる

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。
我ら裏の仲間を手にかけた
恨み必ず果たしてくれる

許すまじ勇者め・・・・・・・・・・。

許すまじ・・・・・・・・・・。

許・・・・・・・・・・。

聖女の日記（後書き）

はい、今回の目的は「奴隷が神殿に引き渡され」「少年神殿騎士として戦場に引きずり出されて惨たらしく殺される」というコンセプトでした。中世の十字軍がモチーフでした。
え？死んでないじゃないか？

いやあのーそのー（^^；

なんか書いてる途中で変に纏まっちゃいまして（汗

しかも日記風にしちゃったので最後にモノローグ入れるのも変になってしまい断念

本当なら「奴隷としても長く生きる」と「戦場に無理やり連れ出され人を殺させられた拳句の果てに殺される」どっちがいいの？という命題……。

失敗したorz

ついでに追って皆殺しでやっぱ恨みの中に入ってるけど説明不足の感じが一杯

失敗したorz

気にしてもしようがないか……。まあメイン小説が進まないのは仕様デスネワカリマス

とある王達の晩餐（前書き）

まず2話が絡んでいます（ごめん間違い3話

2話を読んでいないと意味がわからない（3話です）

と言う事態に陥る可能性があります

って言うよりも今回言葉遊びのニュアンスが多いので考えながら読んでみてくださいと幸いです。

意味判らなかった？ゴメンナサイ文才不足は否めません

とある王達の晩餐

昨日、我らの王と名高き勇者さまが晩餐会を開かれており、私は名誉な事に丁度その日の食堂扉の番人の勤務でこのお二方のお食事の間扉の前で佇んでいました。

王と勇者様はお二人で仲良くお酒の話や国の未来について語られています。

「中々美味しいですな。隣国の晩餐会で出た食事よりよほどおいしいです。」

「勇者様にそう言つて貰えるとは、料理人一同手を尽くした甲斐があります。」

「ええ。王が羨ましい。これからこのような美味しい郷土食事を食べる事が出来るのですから。」

「勇者さまとて色々な国を回られて色々な食事を召し上がられている様子で博識ですな。」

「ふふふ、王とお話出来る機会など勇者になる前は考えても居ませんでした。しかしその頃の杵柄とでも言いましょうか色々な食材について詳しくなりました。このワインは北の物ですか？」

「いえ東の国の物ですよ。私の蔵の中でもお気に入り一品です。」

「おつと失敬。この辺りで飲むワインだと北のものが隣国を通じてこの国に流れてくるものが多いとお聞きしまして、これも其方の物

かと思いきいてね？お食事のほうも食材の中に北からの物がありましたのね？」

「ワインの味利きは中々難しいですからね。勇者さまが間違われるのは致し方ないでしょう。」

「そう言って頂けると助かります。そういえば教会本部でこの間飲んだワインも中々美味しくどちらから運ばれて来たのかとお伺いした所、隣国から送られてきたものだったそうです。王も一度教会に伺って飲まれてみては如何です？」

「ワインを飲むために教会本部に出向くとは勇者様は剛毅な事ですね。ですが近々お伺いする事もあるのでその際に頂きましょう。」

「それが宜しいと思います。」

2人は和やかに談笑されている。

「そういえばこの国の一の姫様は隣国に嫁がれるので？」

「いえそういう話があっただけで、この間無くなりました。」

「それは残念ですな。お姫様もさぞかし気落ちなされているでしょうに。」

「ええ。なくなってしまった事を悲しんでいます」

「それ程に悲しまれているのだしたら教会本部に勤められては如何でしょう。神の御許で祈られればその心の痛みを少しは和らげる事も出来ると思いますよ？」

「いえいえ、それには及びません。親馬鹿と思われるかも知れませんが私は妻や娘や息子達を愛しておりますので近くに置いておきたいのです。」

「なるほど王は良い父ですね。」

少しの穏やかな沈黙の後、勇者様が続けます。

「先ほどのワインと食材の話なのですが、ワインはもう少し味の薄い物を食材は匂いの薄い物を使われると健康によく長生き出来ると思いますよ。私などは健康の為1日1本エリクサーを飲んでいます。王もいかがですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ふふ。変わった健康マニアと良く言われます。自分としては随分好きなのですがね？勇者業は肉体が資本ですので健康には人一倍気を使うのですよ。」

「・・・・・・・・・・。」

「それと、一の姫様が一日も早く悲しみから立ち直られ新しい恋人を見つけれれるのを神にお祈りさせていただきます。それでは自分はこちらで失礼させていただきます。」

そういわれると勇者様は退室されました。勇者様が立ち去られた後、王は終始無言で椅子に座っていました。勇者様との会話の余韻に浸られているでしょう。私の仕事はこの門の番人立っているのが仕事ですから王が早く退室してくれないかな？などとは思っていま

せんよ？

とある王達の晩餐（後書き）

はい。

今回はここまで。まず何処がダークだ！と思われた方もう一度先頭からどうぞ

2回目読み直しても何処がダークだ！と思われた方はゴメンなさい
自分の力量不足です。

以下ネタバレ

まず

無くなる＝なくなる＝亡くなる

ワザワザ平仮名で書いた意味を発見できた人はいるのか？（自分で

書いて読むと当たり前ながら気がつかないわけが無いわけで

郷土料理（この国の料理）なのに北の食材がはいっている？

「北の異物が混じってる。　なんで？」

食材は匂いの薄い物

健康に長生きできる

明らかに変な言い回しですよ？

お姫様が悲しんでいるから教会の本部にお姫様を連れて行ったら？
って明らかにおかしいですよ？教会に行かれては？なら判ります
が態々1国の姫を本部に連れて行行って可笑しな話ですね。

更に最後で

「神にお祈りさせていただきます。」

これもおかしい言い回しですね。まるで毒の件黙る代わりに姫を教会に引き渡せという脅迫みたいに読めるのは気のせいですね

隠語だと

ワイン＝経済　お金＝指示

という3つの意味で読めますね

今回はホノボノ日常篇でしたではまた。

恋焦がれる者（上）（前書き）

上下になるか上中下になるか不明

F a t eがまじで書けぬ・・・。
なのに此方はおもしろいぐらい
ペンが進む

・・・。
こっちがサブなのに・・・。

恋焦がれる者（上）

今日は彼らが教会を訪れるそうだ。彼とは数年の付き合いだが彼の人柄も性格も考え方も私と良く合うのに一つだけ致命的に合わない事がある。最早どうにもならない事だとも、最初から決まっていた事だと思っても、どうしても欲しかったもの……。

いけない。これ以上思っではいけない。それは彼への裏切りであり私が信じる神への冒瀆だ

私は神への祈りを切ると大きく息を吸い大きな溜息をつく。彼と会い取り留めない会話をしたり論議をするのは楽しく嬉しい。だが彼と会うという事は必然的にこの身を焦がす物……。そう嫉妬……。それを実感してしまう。いつもなら仕事や祈りなどでこの思いを誤魔化す事も出来るが彼と会うときはそれも出来ない。ああ嬉しく悲しく怖く喜ばしい。この感情はなんと呼べばいいのだろう。

そんな事を考えていたためか私は肩を叩かれるまで後ろの気配に気がつくことが出来なかった。振り返る私が見たのは満面の笑みの彼だ。思わず今まで考えていた感情が驚きと共に顔に浮かびかけたが意思で無理やり押え込む。そして残すのは形式的な笑み

「お久しぶりです。勇者様」

「ええ、お久しぶりです枢機卿閣下。閣下もお元気そうで何よりです。」

彼も形式上目上に対する礼を取る。目上の肩を叩くなど礼の上ではやってはいけない事なのですが実際の立ち居地は逆なので良いでし

よう。

「相変わらず目上への礼は辞めて下さらないのですね？」

「年上に対して礼を取らないのは失礼に当たりましょう？」

いつもと変わらないやり取り。それが嬉しくそして嫉妬が我が身を焦がす。

「しかし勇者様に目上の礼を取られては私が目上の貴方に礼を立てれないのですが・・・」

「氣に為されますな。何時も通り閣下は堂々としてられてれば良いのです。」

満面の笑みで彼は私に笑みを返す。ああ彼は本当に良い人だ。だから余計に私の嫉妬は身を焦がす。何度彼と気が合わなければ良かったのと思ったことか。何度彼が相応しくなければ良かったと思ったことか。だが彼は良き人であり私の親友であり勇者なのだ。

「ところで積もる話もありますので、執務室にお邪魔させて頂いても宜しいですか？」

彼の言葉を聴いて私は慌てた。そうだ。勇者様をお出迎えすらせず、尚且つ勇者様に出向かせて、こんな所で立ち話をさせるなど教会の面子に関わる。

「慌てなさるな卿。今回私が早く着きすぎた責もある上に、まだ誰とも枢機卿とは合っていない。」

悪戯っぽく目を細めて彼は小声で私に呟く。私は瞬時に話を理解して応える。

「ええあまり綺麗とは言えない執務室ですが美味しいお茶をお出しできると思います。」

「ええ閣下の部屋のお茶は美味しいので何時も立ち寄ってしまいます。今回も期待してみてもよろしいですか？」

彼の笑みに思わず私も自然の笑みを浮かべて応える。

「ええ、この間良いお茶ッ葉が手に入りましたので今回も期待しておいて下さい。」

私達は私の執務室に向かって歩き出した。

恋焦がれる者（上）（後書き）

あうあうゝ何故だーなんでこっちほぼ毎日更新になってるんだー
ー

もうなんか疲れたよパトラッシュ

恋焦がれる者（中）（前書き）

3話構成になりました。

因みにこの先本当に何も考えてない。なんで毎日更新偶々してましたが次で多分暫く空きます

そして何故か某FPSで小説を書く案が落雷の音と同時に閃いたのが今日の謎

恋焦がれる者（中）

彼のお茶は熱く私のお茶は温めに入れる。彼も私と同じ猫舌なのだが、なんでも熱いのを冷ましながらゆつくり飲むのが好きらしくいつも熱いのを注文するのだ。いつもなら私の補佐官がお茶を入れるのだが、彼とお茶を飲む時は私がお茶を入れている。一番大きな理由は久振りに会う親友のもてなしに他人を頼るのは私の矜持が許さないのだ。

お茶の入ったティカップを2つ持ち私は執務室の扉の前にもどつて来ると扉は音も無く開く。毎度の事ながら私の足音と気配で距離とタイミングを測れるという超絶技能には驚くばかりだ。お茶を彼に出しながら早速世話が始まる。

「今回の東の方はどうだったんだい？」

「いやいや。大変だったよ。報告聞いていると思うけど人身売買組織一つ潰して5つの国から恭順の誓約書貰って来たよ。」

「人身売買組織の件に聞してなんだけど王族まで皆殺しって恨みを買ったんじゃないのかい？」

「んまあそうだけど、これ今回の件の誓約書」

渡された5枚の紙それを読んで私は目を剥いた。

「な！国土の一部を教会に供与？こっちは一の姫を教会本部に差し出す？」

「そこまで恨みを買うなら一層の事とそこまで徹底的にやったから、その誓約書がココに届かないように色々無茶しすぎてあちらさん中はガタガタになってるから、逆に本部の方から調略かけて貰えれば国ごと乗っ取れると思うよ。俺も少しヒヤットするぐらいの使い手を何人が送ってくるっていくらぐらい掛かったんだろうね？」

お茶を優雅に飲んでは彼は勇者の貫禄とでも言うのか凄く落ち着いていた。私には無理だな。日がな一日中凄腕の暗殺者を警戒しながらの生活なんて考えられない。

「んでこれから先が本題。その領土と姫様の件だけど卿に任せていい？」

「いや任せるも何もこんな大きな案件、枢機卿会議で教皇にもお伺いしないと駄目に決まってるじゃないか！」

私は思わず叫んでしまいがら応える。任せると何気なく自分に全部やらせようとした親友に頭を抱える。

「いやー他の枢機卿って基本的に腐ってるから、預ける俺としても安心できるのが卿しかいないんだよね？」

「否定は出来ないけど、と言って今までの教会の私有地を全部足したぐらいの領土を独占に政治的な人質を持ったりしたら他の枢機卿方や教皇睨下を全部敵に回すに決まってるじゃないか！」

「頑張れ未来の教皇閣下」

親指を上げてサムズアップしても駄目！うつ今までだってもそうだったけど彼の遣り方は荒っぽすぎる。だけど唯の司教だった私が彼

の力と協力のお陰で閣下と呼ばれる地位まで引つ張り上げてもらえたのは事実だし、教会の腐敗を嘆くだけで力の無かった私をここまでの地位にして教会の不正を正す機会をくれたのは間違いなく彼のお陰だ。

私は溜息をつく彼の頼みの上にここまで不安定な案件では自分が行うしかないだろう。

「それで方法は？親友？」

「決まってる。幸いにも今回の一件俺を殺して奪回を狙ったからまだ教皇の耳には入ってないはずだ。ならこの誓約書見せずに今晚の枢機卿会議でごり押ししてしまえばいい。最悪今までの利権を手放すといえば怪しむだろうけど首を縦に振らす事ぐらいは出来る。それと親友と言うよりこの密談聞いていると悪友じゃないかい？」

私達は2人して部屋の中で笑いあった。

恋焦がれる者(中)(後書き)

今回は何の変哲もない普通

次の話とのギャップのための準備です。

ついでにネタ募集中

なんかろくでもないはな・kさj l j あ s j d k あ k s 閃いたああ
ああああ

いいネタ思い出したうし@2・3話はネタがあるぜ！
がその後の為にネタ募集中
ろくでもない実話募集中

そして本来書きたかったのが進まない・・・。

恋焦がれる者（下）（前書き）

次のネタの前に本分書きたいだが何故かこの作品無駄に筆の乗りが
いい（誤用だけどきにしないで）

と言つつ事で@2 - 3話は毎日更新その後はネタ思いつき次第

恋焦がれる者（下）

昨日の会議は予想以上に巧く行つた。鉦山の管理権を持つていかれたが東の5カ国の件は私に一任される事となり私は東部管理官という役職に着く事となつた。正直彼の話術には毎度ながら呆れるしかない。なんとというか性質の悪い夢を見ている気分になる。

「さて、これで一安心ですな。卿。私はまた少し遠出してくる予定です。後のはお任せします。」

「今度は何処に行く予定ですか？勇者様」

彼は中央の本部に長く居る事はない。いつも何処かの国を回っている事が常だ。彼がここに居てくれればいいのだが、彼は色々な理由で本部から居なくなる。彼に本部に居るのが嫌いなのかと聞いたところ「基本的に俺って宗教って肌に合わないのよ。宗教の基本理って『神の語る正しき言葉を盲目的に信じなさい』じゃない？んで俺は何も考えない人間が嫌いだから。」との事で探求者や求道者は大好きらしい。

「一応今度は南の島国を回ろうと思います。まだあちら側では海の魔族の活動が活発だそうなので「資源の輸送」と「その輸送の護衛」それに「討伐戦力」としてもあちら側に一度行って欲しい着て欲しいという打診がありました。一度伺おうと思います。」

「大人気ですね？」

「致し方ありません。なにせ自分は勇者ですから。」

彼は平然と応える。その姿に苦笑を思わず浮かべそうになるがここは往来の真ん中誰に見られているのか判らない以上迂闊な事は出来ません。

「勇者様」

彼に何時頃次に返ってくるのか伺おうとした所聞き慣れた声が響く振り返る私の横で彼女は彼に抱きつく。その姿に心の隅に押し込めた思いがドロツト溢れ出す。イケナイカンガエルナ心が悲鳴を上げ理性が吹き飛びそうになるのを必死でこらえる。

「あまり人通りの多い所で抱きつくのは良くないと思うのですが？」

「勇者様が用事があるからと言って私たちを置いていかれ寂しかったからです。」

「それは失礼。女性にさびしい思いをさせるのはマナー違反かな？」

ヤメテクレソノエガオカレニミセナイデクレ。ソノエガオハワタシダケダツタハズナノニワタシニダケムケラレルハズダツタノニ彼女は彼から離れると此方を向いて一礼する。

「お久しぶりです。兄さん」

アアウラメシイ。ナゼカノジョハセイジョトシテエラバレタノノダロウ。ナゼカノジョガイモウトナノダロウ。ナゼワタシニマオウヲタオスダケノチカラガナカッタノダロウ。

ナゼダナゼダナゼダナ

「兄さん。幾らなんでも可愛い妹の前で考え事は良くないですよ。」

妹にポカリと叩かれて私は正氣に戻る。

「失礼。また一段と美しくなった妹に驚いて居ただけですよ。ところで、ここは神殿の中なのですから兄ではなく閣下と呼んでください。聖女様」

口から滑り落ちるのは懺悔ではなく。薄っぺらな嘘と偽りの注意。こんな言葉を言いたいわけではないのに、こな風に眺めていたいのではないのに、閣下などと呼んで欲しいのではなく私の名を呼んでほしのに、私には眺める事しか出来ない。

「はい。えへへ。勇者様も私最近綺麗になったと思います?」

「そうだね。最近一段と雰囲気明るくなったお陰で綺麗になったよ。」

彼の言葉に一喜一憂する彼女あどうして私がどうしても欲しかった物はこんなにも近くて遠いのだろう……。

「と言う事で、とりあえず着いて早々に悪いのだけど南の港行きの馬車を捕まえておいてもらえるかな?」

「そうですね。助けを求める人が居るなら早く行かないと。判りました。後の2人も見つけて南の門で待機してますね。」

そう言い残して彼女は風の様に走っていく。ドオシテドウシテ

「ふふふ、可愛くて良い妹だな。」

彼が笑う。私の気持ちを知らないで。でも彼にもこの心のうちは見せてはいけない。妹に恋焦がれるのも、神に仕える聖女に恋焦がれるのも、その先に在るのは異端者の烙印のみ。身を焦がすほどの嫉妬は誰にも語れず誰にも伝えられない。

「ああ、自慢の妹です。さて、私はこの案件の地盤を堅めに行きます。」

「次は多分2カ月後ぐらいに返ってくる。その間頼むよ。」

自分の執務室に歩き出した私に彼はそんな言葉を投げかける。2カ月後が楽しみで怖い。いつか自分の心のうちが抑えきれずに噴出してしまいそうで。彼を殺そうとしてしまいそうで。彼女を攫って何処までも何処までも逃げてしまいたい。でも私は今ここでその言葉に手を振りながら執務室に向かっている。そうだ忙しい執務に追われればこんな事を考えないで済む。私は急ぎ足で執務室に向かう。背後で彼がそれはそれは楽しそうな笑みを浮かべていたのも知らずに

恋焦がれる者（下）（後書き）

そういえば今回のコンセプトって

嫉妬と友情だったけど

この小説のコンセプト何処いったんだろう………。本来の目的から大幅にずれてる……。

なんで書いたんだろう？まあいいやw

ついでに次の内容決まってるので次回予告

「人が消える時」

前回の人身売買関係の時に出せばよかったと昨日思い出したネタで昨日の昨日まですっかり忘れてた。まあ実にやば過ぎて誰かに話せる内容でも無かったんだけど、今更だから1人でも知っておいて欲しい話

火が生得る時（上）（前書き）

お昼間投稿結構珍しい？

謎に徹夜で小説延々と書いてた。お陰で眠い……。謎のテンションで書いたので今見直して微妙に後悔してる。だが、気にしない。なんで？眠いからめんどくさい

前書きと後書きの温度差は書いた時のテンションの差

火が生得る時（上）

悲鳴と怒号が反響の様に響き渡る。辺り一面に広がるのは炎。熱くて苦しく痛い。それでも逝きたくて必死に足掻く。

イヤダイヤダイヤダ

置いていかないで？ 一人は嫌だ。唯一人でこの場所に残されるのは苦しくて、一人でこの世界に居るのは怖いんだ。だから僕一人だけ置いて逝かないで。ねえ待って僕一人だけを置いて逝かないで僕も連れて逝ってよ。その先が地獄でも天国でも構わない何も無くても構わない。でもこの世界でたった一人になるのは嫌なんだ

君はこの世界が怖いのかい？

誰？・・・誰も居ないのに声だけ聞こえる・・・誰でも良いや。うん僕はこの世界が怖い。だからお願いがある。僕をあの場所まで連れて行って

あの場所に行けば君は死ぬよ？それでも君は逝くの？

うん。だって一人の世界は怖くて寂しいから、だから僕もあの場所に逝っておかーさんやおとーさんやおねえちゃんの所に逝くんのだ。例えばその先が何も無くても別に構わない。死ぬ最後の最後の瞬間まで誰かと一緒に居たいんだ。

・・・・・・・・・・ごめん。私は君をあの場所に連れて行かない。そして私がやろうとしている事は君にとって茨の道になる。だから、私は君に謝るすまない

「・・・・・・・・ま」

何を言ってるの？意味が判らないよ。ねえどうして僕をあの場所に連れて行ってくれないの？

ねえ何をしようとしてるの？ねえ？ねえ？

「・・・・・・・・し・・・・・・・・ま」

私に名乗る名は無い。遠い昔に名は置き去りにして来てしまった。もう誰も私の名を知るものも名を呼べる者も居ない。ただ、永遠の時間の中で時を彷徨い続ける亡霊の様な者だ。だからこそ君の様な素質を持つ者が必要なのだ。だから私は君を生かす。すまない。

「ゆ・・・・・・・・し・・・・・・・・ま」

嫌だ嫌だ嫌だ。僕はこんな世界で生きたくなんか無い。嫌だ辞めて嫌だよ！

「勇者・・・・ま」

いや君はこの世界では間違いなく死ぬ。だが君はおねえさんやおとーさんやおかーさんの所には辿り着けない。

「勇者様！」

ああそうだな。もし、この世界に1人になるので無いのなら何も問題なんか無い。そうだ。そう選らんだ未来なのだから。

意識が覚醒し目を開いた私の瞳に写るのは顔を近づけて心配そうに覗き込む聖女。どうやら私はうなされていたらしい。昔の夢を見ると何時もそうなのだからいい加減君のその心配そうな顔も見飽きてしまった。そして、過去の夢は何かが起こる予兆である事が今のところ命中確立100%。さて、今回は何かが起こるんだろう？

「おはよう。変わった事が何かあったかい？」

「勇者様がうなされていた事です。」

いや即答されてもね？

「後は、先ほど馬が急に怯えて馬車が少し止まった事ぐらいです。」

「確実にそれだな。魔術師！悪いが馬車のスピードを上げてくれ目の地の港まで辿り着けるなら馬を使い潰してしまつて構わない。」

ガクンという衝撃と共に馬車はスピードを上げて夕暮れに差し掛かった街道を疾走して行った。

火とが生得る時（上）（後書き）

さて相変わらず前置きが長いぜ！

なんせ今回書きたい事がこの文の中に伏線しか書いてないw

スイマセン

「人が消える時」「火とが生得る時」の語呂合わせでタイトル書いたら思わず書いてしまった勇者設定……実は勇者の設定

「第一話で書いただけの分量しか考えてませんでした。」

ええ。今回の話語呂合わせで辻褃合わせて書いたものです。勇者の過去なんて何となくで書いてだけで全く想像も想定も考えてすらいませんでした。

だから、この話と1話矛盾してる箇所在り（気が着く人が居たら良い感≪「勘」でも 感性の「感」でもok≫してるね！。何とか後々フォローすると思う……書ければ

いえね？人が消える時（上）じゃ余にも捻りが無い。って事で語呂合わせでタイトル書いたらイメージがポンドンカンと書けてしまつてw

まあお陰で将来的に感情移入描写が判り易くなるかな？（いやそんなに長いこと書く予定も無いのですがねw）この話は4話構成になるか3話構成になるか微妙

3だと少し視点が足りなくて4だと微妙に丈が足りなくなりそう。

この次はニュースの面白い記事で1話と 勇者と魔術師の掛け合わせで1話 があるけど・・・意外とネタが尽きない。いい加減尽きてイヤイヤながらメイン書きたいのだが・・・・。つかこの話って元々メインが書けないので息抜きで書き出したのに謎に一番書き易い。イヤホイ（何w

追加でこの話の元イメージは阪神淡路大震災です。 伏線です。（え？と思った人いたら作者はわーいb bと喜びます。

更に追加でタイトルの補足すると

「火とが」は「火と共に」

「生^き得る（える）（読み方）せいえる」で「生まれる」

「時」は「時」のまま

で「火と共に生まれる時」＝「破滅により生まれ出る命」ってイメージで書きました。

火が消える時（中）（前書き）

一眠りして昨日の夜読み直して・・・・・・・・・・。
なに書いてるんだと頭痛くなってきました。

・・・・・・頭痛くなったのでもう1回寝直してしまったのは内緒。

正に黒歴史黒歴史。（投げっ放し

そして4話構成にする事にしたのだが・・・・・・・・。上中中下？

よし出前にしよう！特上、上、中、下
いや其れとも梅竹松か？

今日もテンション爆裂なのは仕様です。

火が消える時（中）

暗闇の中、遠目に見える港町は明らかに酷い有様だった。数時間前までこの国で屈指の港町だった場所はもう日が落ちたのに今や一つたりとも明かりを見ることが出来ない。勿論街道も無事などとは言える状況でなく途中で地面が泥濘ぬかるみ、大木がゴロゴロと転がって船の残骸らしきものも多くあった。それらが道を塞いで居たので馬車を捨ててそこからは魔法で飛び越えて来た。

大津波

端的に言ってしまったえばそれだけだ。モンスターがやったのか、天災的な物なのか、魔族の残党の仕業か考えらる答えは多くそして断言できる要素は無い。しかし今やるべき事は考える事では無くまずは爆音が天を衝く。

この海から上がった来た馬鹿共を叩き殺してからだ。体に魔力を通して肉体強化と武器と体に魔術障壁を展開しながら突撃する。

《我敵を蹂躪する者、我が前に立ちふさがる物、その全てを踏み潰せ》
チャリオット《突撃する戦車》

俺の魔力に染まった剣を切っ先に俺の周りの障壁ごと1本の槍の様にクラゲの大物と蟹の小物とその他を数十まとめてぶち抜き、その数倍を叩き潰し、更に数倍を巻き込み吹き飛ばす。俺が1番得意とするのは対多数の電撃戦だ。どうしてもワラワラ蟻の様に沸いてくるモンスターとその後ろから強力な攻撃を準備する魔族を相手すると、如何しても前衛のワラワラを大雑把に短時間でぶっ飛ばして如

何に後衛の魔族が詠唱が終わる前に叩くかが大きな命題になりそのスキルだけが異様に上手くなってしまった。そういえば魔王との戦いも初撃で四天王の攻撃弾きながら最速で魔王に一撃入れられたのが大きかったな……。あれ？俺物凄い卑怯臭くないか？魔王に詠唱させる前に一撃入れるって仮面ライダーが変身する前に手傷負わせてる様な物だよな？

思わず考え込む俺に数体のクラゲの大物が触手を数十飛ばしてくるがだ、基本的に上位モンスターの攻撃といっても俺の障壁を貫ける訳も無く全て障壁に弾かれる。一応、魔剣クラスの武器と一流の使い手が合わさってやっと抜けるかどうかというクラスの防御力はある。だってそうしないとドラゴンを盾に上位魔族数人なんてのが相手してられん。幾らこつちが勇者といってもドラゴンと魔族同時に襲って来るとか卑怯だろ……。

体当たりなら衝撃ぐらい通ると思ったのか蛇の様な魔物が中々のスピードで突っ込んでくる。海蛇だったかな？カウンターで頭から半ばまで切り捨てて剣を振りぬいた体制で剣に込めるのは炎

《我名を求む、求む名は聖剣、全てを焼き尽くせ》
《白銀の聖剣》クラウ・ソラス

振りぬいた体制からの返しの刃で剣を振るい剣に籠った魔術を全方位に解き放つ。放たれた神聖な炎は迸り全周のモンスターを焼き尽くす。後ろでは魔術師の大型魔術で敵が軒並み茹蛸になってる。オクトパスが混じって居るだけに本当に茹蛸だな。後で余裕があればたこ焼でも作ってみるか。そんな適当な事を考えながら俺は長めの詠唱を始める。

《王を示す者、王を選ぶ物、王とは王になるから王である》

ここまでで第一詠唱

《ならば我は王の素質をもって、その偉大な聖剣の名を求む》

第二詠唱完了。次の第三詠唱でこの魔術は完成する。

《聖剣よ我が王としての素質を示せ》 《王が王である為の聖剣》
カリバーン）

次の瞬間六色の光が周りに居た全てを飲み込んだ。

火が消える時（中）（後書き）

今回・・・なんで戦闘シーン書いたのでしょうか？正直自分にも書き終わって予想外過ぎた。

ええ。地震 大津波が伏線の答えで、町に救援に駆けつけた主人公達が人を救助する話が本題なのですが。

いや津波で魚が陸に打ち上げられるとか船が打ち上げられると言うのは良く聞く話だったので、モンスターも打ち上げられる？襲われないと不自然？・・・普通の小説になってるじゃん・・・。

Q・何故こうなった！

A・いや戦闘シーン数行で終わらせるのも不自然だったのでこうなった。

最初はチャリオットでFAでした。んで直ぐに町に救助に向かい人を介抱する話にするつもりが、余にも味気ないって事で戦闘が長くなりました。

ゴメンナサイ。

自分的には本題とズレまくってる駄作です。まあこれで4話の文は十分足りるからいいかw

後ゴメンナサイ何だかんだでパクリが多い

灼熱地獄（魔術科の劣等生）

カリバーン（f a t e）

クラウ・ソラス（漆黒の螺旋）

チャリオット（これは古い小説のネタからだけど中身は魔術科の劣等性のパンツァーとフランクスの合せ技になったなー。）

チャリオットの元ネタは

車輪・疾走する・車輪で運ぶ物

w h e e l / w h e e l i e / w h e e l e r

という古い小説の詠唱から未だに記憶に残る詠唱

灯が消える時（下）（前書き）

そつえば唐突に前書き書いてる最中にクラウ・ソラスの聖剣の名前変更しようと思って忘れたって事実を思い出す。まあいいや。

追加で確認しなかった事実を思い出す。・・・振り仮名どうなってる・・・修正しなきゃ

更に今回書かなきゃならんのは問題が大量発生したと言う事。ぶっちゃけ文章量が可笑しな事になった。どうしたもんか・・・。

一応一日1回更新で目安1000文字前後で分割する更新予定。

灯が消える時（下）

町に辿り着いた俺達が見たのは相変わらずの情景。つまり地獄絵図
って事だ。

《凍て付ける、氷の棺、その中で眠れ》
アイスコフィン
《深蒼の棺》

俺の魔術に閉じ込められた蛸が骨の髄まで凍りつく。蛸に骨はないけどね？地面に水が残っているので強力な電撃で全部まとめて掃除してしまいたいが、それやると未だ生きてる可能性のある人間まで丸焼きになるからできない。ついでに同じ理由で大型魔術で根こそぎ吹き飛ばすのも駄目となる。正直やり難い。こういうワラワラ沸いてくるのは人海戦術で数で押し返すか大型魔術でピンポイントでまとめて潰すかしないときりが無い。人を集めようにも何せ大津波の後にこの大量のモンスターだ。偶々生き残っても戦闘能力の無い者は早々と殺されるし戦闘能力が在ってもこの多重包囲の奇襲に集結するどころかドンドン各個撃破で数を減らされているだろう。

仕方ない自分の持つカードを切ろう。こんな所で切るべきカードでもないが、ここでこれ以上死人が出られてもねえ？無駄な死人を出して喜ぶのは葬儀屋と教会のエセ神父どもぐらいなものだ。

《我呼ぶは、4人の死騎士、盟約に基付き来い》
サモンス
《使役召還》

俺の周りに魔方陣が開きその瞬間4人の騎士が降り立つ。俺はそいつらに命じる。モンスターを海に誘導しろと返事は返ってこないが4人は次の瞬間消える。まあこれで恐らくモンスターは海に向かうだろう何せ契約で縛っているからやりたくないと思ってもらえない訳にいかないからね。

「奴らと呼んだのか？」

感傷に耽っていたせいで後ろの気配に気がつかなかった。やばいとは思ったが声の主が誰だか思いだして溜息を吐く。

「頼むからもう少し存在感って物を出してくれ」

嘆息と共に吐いたのはそんな滅茶苦茶な命令。というか逆に存在感出されたら困るのは俺だ。そいつは目を細めて唯立つのみ。まあ、コイツならそうだろうな。

「とりあえずモンスターは？」

俺が判りきった質問を彼にすると彼は短く全て海に引き上げていると簡単な答えが帰って来た。良かった無理やり契約を捻じ曲げて逆に大暴れされたらどうしようかと思った。俺の背後で唯無言で命令を待つその男はまるで忠犬だ。まあそれぐらいが俺達の関係には丁度良い。

「行くか、魔術師。お前は生存者の位置を探し当てろ。俺は救助活動を指揮する。聖女と剣士は？」

俺の言葉に魔術師は左手を道の向こう側を指す。この暗闇の中では流石に見えないが向こうから軽い足音が2つ近づいてくるのが聞こえる。恐らく彼女達だ。俺の顔をを見て魔術師は背を向け俺は2人に指示を出す為に足音がする方向に駆け出した。

灯が消える時（下）（後書き）

はい。今回はここまでえーとスイマセン

相変わらずとんでもない事になりました。

．．．．．6話構成に．．．．．

ねえねえ書けば書くほど本題から遠ざかるってどうよ？

今回戦闘無しで本題にいきなり行くはずが、「なんか変」と軽く戦闘描写入れたら、魔術師の軽い伏線入れるかと思つて軽く入れたら、魔術師が先発する事になつて、勇者がする事を魔術師がする事に、そうすると魔術師の性格が段々勇者に近くなつても完璧にすると話がおかしくなるから。。。に（明日の更新予定です）

うー書きたい事別なのに其処に至るまでの描写がえロい事に

助けてエロイ人！！

描写削除して淡々と最初は書いてたのにドンドンキャラクターにのめり込んで色んな設定書き足していくことに．．．これファンタジーよりも文学がメインなんだけどな．．．。

つてかキャラ立て必要としないで気軽に書けるように名前すら考えてなかったのに設定だけが増えて行く。一回なんかテンション上げるよりも一気にテンション下げないと駄目かこれ？

ちなみに今日短いのは次回の文が妙に描写と説明が増えて豪い量に

なつたせい。

とりあえず@2話半は既に書きあがつてるから今日更新するか迷ってる。それより更新するならこの続きのアホみたいに長いのをどうするか・・・。

取り敢えず保留「異世界の生き方」でも読みながら考える

人が消える時（魔）（前書き）

とりあえずタイトルで遊ぶ（遊ぶと言うより、こんな投稿のしかたはどうだろう？

と思いついたので試す。

タイトルイメージは中を読んでご想像ください。

人が消える時（魔）

私は勇者の指示に従って人間の生気を追う。私にとって人間は食すにも足りない餌だが餌を探し当てる本能は魔族として当然ながら備えているので生存者を探し当てるのは簡単だ。

「おい、その人間。」

私は肩を押えながら蹲っている人間に声を掛ける。人間とは面倒な生き物だ。互いに助け合わなくては生きていけない脆弱な生き物であり、そのくせに人間同士で争い殺しあい助け合わない。だがその集団能力は軽く強者たる屈強な魔族を凌ぐ。あまりにもチグハグだ。あまりにも不完全な生き物。生物として歪んでいると誰かが言っていたのを思い出す。

「なんだ・・・。」

肩に手を当てた、そいつが此方を見る。その目には光が無い。ふん腐った目だな見ていて胸糞が悪くなる。自分で何も出来ず諦観する事で諦める。ツマラナイ

「この通りの生存者は其処の宿の下に4人居る。3人は重症1人は軽症だ。後から来る連中に伝言を伝える。」

私はそれだけ伝えると歩き出す。この辺りに他の生存者の反応は無い。在るのは無数の屍のみ・・・歩きだして暫くして私の足が止まったのは何かの偶然だったのだろう。余にも小さな生氣

の反応、普段なら時期に死ぬと判断して歩き出すのだがその時は何故か足が向いた。

多分あまりにも多くの死気を感じたからだったのかもしれない。

生き物は死ぬ時に残っている生気を死気に変えて周りに放つそれは魔族も魔物も人間も何も変わらない。魔族は当たり前ながら中々死なないし、もし魔族が死ぬとしても数十年に1人とかそんな程度だ。逆に人間を殺すとしてもこんな無駄に死気を撒き散らす様な殺し方はしない。人間は餌で魔族は生気を食うのだから生気が無駄に死気になるような無駄な事はしないのだ。だから幾ら私でもこれ程の死気に囲まれた経験は無い。

反応は半壊した以前は店だったのだろう建物の中からだった。歩みを進める私の視線の先に居たのは一人の人間。その人間の後ろから生気の反応を感じる。私はその人間をそつと横たえる。予想通りその背には生存者が居た。赤子だ。恐らくこの人間が赤子をこの狭い横穴に入れ自分の体で蓋をして赤子を守ったのだろう。背筋を走るのは悪寒なのか喜びなのか・・・魔族にとつて赤子が死ぬのは普通の事だ。この世に生れ落ちたその瞬間から生ある者は弱肉強食という食物連鎖の中に立っているのだ。赤子だからなどと言うのは理由にならない。故に誰かが死んでも誰かに殺されても誰も何も思わない。そいつに生き残るだけの運も力も無かったそれだけの事だ。親が子を守る？何故他者を守る必要がある？

だが人間は違う。人間は自分の命を賭けてでも他者を守る。私には理解も共感も出来ない考え方だが、本能だけが告げるのだ「ああ綺麗だと。」それは憧れに近い情景なのだろう。魔族であり強者である私が弱者に憧れる、滑稽と言ってしまうえばそれまでだが滑稽と言うには私の心はこの本能に毒されてしまっている。彼はそれをなんと言うのだろう？唯静かに底の見えない笑みを浮かべるのだろうか？私は赤子に手を伸ばし

首を絞める

赤子の生気が失われていくのが感じるのでもなく判る。ああ私は今この脆弱な命を殺そうとしている。何故だろう？何故私はこの命を殺そうとしているのだろうか？判らない。唯感じるのは目の前の命が失われ行く光景に美しいと感じる私が居る事。

「それが。。。。事だよ」

その瞬間冷水を浴びた様に正気に戻る。赤子の首から手が外れ赤子はヒューヒューと音を立てている。何故かあの時の彼の言葉が出てくる判らないワカラナワカラナイワカラナイ

火がついたように泣き出す赤子を前に私は立ち尽くす。ワカラナイ彼に従わされてから私は私がワカラナイ、私いや私の心は一体何処へ向かっているのだろう。魔族である私は存在も判らない神を信じるなど意味の無い愚かな行為は必要ではない。だが今は誰かにこの意味を聞きたかった、だが誰も居ない横たわるのは言葉を語る事の無い死者の群。だから私は神の御使いと呼ばれる男に届かないと知りながら尋ねる。

「勇者よ。貴様は私を何処に導くのだ？私は何処に向かっているのだ？私は何をしようとしているのだ？教えてくれ・・・・・・・・」
勇者よ。」

声は赤子の鳴き声に紛れて消える。闇は何処までも暗い。だが、その底に宿る一つの光。光があるから闇がある。闇があるから光がある。でもそれは矛盾

暗き魔族は一筋の光に何を見るのだろうか？

人が消える時（魔）（後書き）

迷える子羊に救いの手を

前回のあとがきでも書きましたが（伏字ですがw
子供みたいな魔族という設定になりました。

そして全7話構成にまた伸びたorz
今度こそ伸びないと言いつつまた伸びそうで嫌だ。

人が消える時（神）（前書き）

神の御使いだからの神

因みに今回も文章少な目な理由は

本来は（魔）（神）はこの1・5倍ほどの分量在ったんですが両方とも削って併せて、次の話にしました。まあぶっちゃけこの（神）と次の（危）は本来無くても問題が無かったりします。

いやね？入れないと勇者が何を考えてるかどういう人間なのか判らないかな？という変な親切設計（何w
ネタが無いから時間稼ぎとも言っ。

人が消える時（神）

魔術師が赤子を連れて帰って来たのには驚いた。正直、彼がそんな行動を取るののもっと先だと思ってた。だからこそ俺は今回は手を出さない事にした。もっともつと苦しみ考える。それが今の彼には必要だ。

赤子を連れてきた彼は所在なさに彼は立ち竦んでいる。当たり前だ。身寄りも無い赤子を連れてきた所で誰かに預けようにも今そんな施設は壊滅してる上にそんな事の前に死に掛けている人間の救助とその治療すら人手も薬も何もかもが足りない。今は時間も人手も1人でも欲しい事態だが彼に子供をどうしたらいいのか教えてやるつもりは無い。俺は彼の視線を意図的に黙殺して救助のプランと救助にいく人間のチーム分けを伝える。

冒険者を中核に動ける人間を配置してそれぞれに残った魔術師と神官を付ける。救助し次第、可能な限り応急処置を施し中央まで搬送してここで聖女を中心とした強力な少数の神官で対応する。自警団や騎士は戦士を中心とした部隊に再編して海からまたモンスターが上がって来ない様に海岸線の防衛に当たっている。救助を行っている人間は民間人が多い為防衛線を構築しないと救助した人間より多くの犠牲者が出てしまうという本末転倒な事態になりかねない。

俺か？俺は魔力タンク 兼 魔力触媒 兼 神官（ヒーラー）だ。俺は6属性全ての魔法が使えるので闇魔法《魔力吸収》（ドレイン）を逆に使って残り魔力の少なくなった魔術師、神官に魔力を補充するのが1つ目の仕事。

また勇者の称号を持つ者は神の御使いと呼ばれるように神の加護

を受け、神聖属性の奇跡を起こす触媒として最高クラスの素質を得ているのだ。つまり俺が居るだけで神官の癒しの奇跡は威力が倍増して魔力の消費も半減するのだこれが2つ目の仕事。

また俺自身も聖女には及ばない物の相当高位の癒しの奇跡を使える為俺自身も治療に参加できると言う万能ぶり。これが3つ目の仕事

これらの事から俺はココに待機する必要があるわけだ。さて指示も終わった事だし近くの重症患者の治療を始めますか。彼からの視線は完全に無視だ。そうやって無視するつもりだったのだが、私が無視するのに痺れを切らしたのか彼から近寄ってきて私に無言で赤子を差し出す。いやどうしろと？と私が聞くと知らないどうにかしろと言いつ返してきた。替わりに治療作業出来るの？と聞き返すと彼は首を振る。なら今お宅に出来る仕事は？と聞くと彼は首を傾げる。無いよね？じゃあ子供の世話よろしく。そういうと彼に背を向ける。その際彼の無表情な表情の中で視線だけが僅かに揺れたのを俺はしっかりと確認する。

ああ実に良い兆候だ。さあココからが試練だ。

人が消える時（神）（後書き）

追加でもういい加減どうなのかと自分でも思うのだが

8話構成にそして次の魔術師*勇者ネタが繋がった。

自分でここまでやると発売延期を続けるゲーム会社みたいで嫌だ！

だが8話に伸ばしたのは後悔しない。べべつに「異世界の生き方」のネタ真似して見たかったから1話伸びたんじゃないんだからね！！

人が消える時（危）↓（降）（前書き）

タイトルイメージは「危うい」

・・・あれ？なんか予定と違う・・・。

間違えたorz

まあ何とかなるだろう。最悪タイトル変えれば良いんだし。

はいやっぱりどうにもならなかった。

「降りる」と言う事で（大分無理な後付け

人が消える時（危） ↓ （降）

俺は治療しながら彼の様子を伺う。最初は唯呆然と立ち尽くしていたが取り敢えず座る事にしたようだ。そこまで至るのに数分の時間を要したと言う事実が彼の困惑っぷりを端的に表しているだろう。様子を伺うのに夢中で多少手元が狂ったのはまあ見なかった事しよう。うんちよっと切り傷直すのに間違えて激痛で相手を気絶させたぐらいだし声も立てずに失神したから誰も気がついてないしね？彼は赤子を抱きながら未だにキョロキョロしている。

魔族は基本的に赤子の世話などしないからね。人間の赤子みたいに泣き叫ぶ訳でもなく生後1ヶ月で歩けるように成り、2ヶ月で言葉を解し、3ヶ月ほどで親元を離れ、半年で魔術を使う。3年ぐらいで成体になりその後数十年して唐突に性別が決まるらしい。らしいと言うのは当然ながら魔族の生態を研究するなんて馬鹿な事を考える人間も普通居らず（まあマッドサイエンティストなら居そうな気はするがそんなのが自分の研究公表する訳も無く）彼から直接聞いた話なのだが、彼は僅か17歳。精神年齢がでは無いよ？肉体年齢生まれてからの時間で17歳。数千年前後生きる彼らからすれば僅か1歳にも満たないのである。故に一般常識に疎い面がある。だからこそ今のうちに知って欲しいのだ。人間というものを。偏見を聞くだけでもなく、一部の偏った人間だけ見るのでも無く、普通の人間の中で人間という種を理解して欲しいのだ。因みに彼は赤子が泣き出したのを見てオロオロして見かねた周りが赤子のあやし方を教えて不器用ながら頑張ってその真似をしている。

ああ実に楽しい。無垢な魂を持つ幼子を自分好みに染め上げていくのは。源氏物語の〴〵もこんな思いで育てていたのだろうな。そんな馬鹿な事を考えていると歓声が上がる。ヤレヤレやっとか。やつと本番が始まるのか。俺が視線を向けると入り口から薬が運び込まれ幾人かの人間が入って来る。彼らは治療の手伝いをしたりしながら

ら色々な話を聞いていく。こちらに来るのも時間の問題かな？数人の治療を終えると何人かの男達が私に話しかけてきた。想像通り彼らはこの周りの商人や冒険者達だった。災害を聞いて駆けつけたと言っているが実際にはたかりに来たハイエナが半分と善意が半分と言った所か。ここで追い返した所でハイエナが漁るのを辞めるとは思えないならタップリその分働いて貰いますか。

先ず彼らに威嚇を混めて自分が勇者である事を告げる。何人かは明らかに凍りついたので顔を覚えておく。伝えるのは仕事をするなある程度は見逃す。何かは言わない。ここで逃げられて人手不足になるよりはマシだ。逆に何人かは明らかに顔を顰める。すまないね、善意で着てくれたのにこんな禄でもない話を聞かせて。冒険者はまず各数人毎に別れて各救助班に合流商人達はもう一度其々の町に戻って必要な緊急物資の調達。ついでに冒険者には夜中一時全員に休息を取ってもらう際にその間に町の巡回をしてくれるのなら構わないと商人にはこの町の復興物資の調達の際に口利きしても良いと飴を見せておく。

彼らは素早く其々の場所に散って行く。やれやれ現金な物だと肩竦めながら俺も治療に戻る。手持ちぶたさに手元に何も無くなった彼を視界の隅に捉えながら。思わず笑みが止まらないココまで思うように物事が進むのは神の加護かな？

ああ素晴らしい、我らが神に、感謝と祈りを

人が消える時（危）↓（降）（後書き）

次まで完成してる。物のその次が中々書けない……。

そして本命いい加減放置できないので今日からせつせとそっち書きます。

って事で

一応@2話で一時更新停止を予定してます。

ここまでお読みいただきありがとうございました。

人が消える時（臨）（前書き）

タイトルイメージは「臨む」

対峙するときというイメージです。

人が消える時（臨）

朝だ。昨日の大災害の傷跡が白日の日の本に晒される時が来た。町並みの半分以上が無くなり中央にある半壊した城の周りには怪我を負った者、親しき者を失った者、子を失った親、多くの嘆きが渦巻く。その中心部で未だ俺達は走り回っていた。昨日の夜の段階で重症患者の応急処置は終わったが軽症者をほとく訳にも行かず、また重症患者の様態が急変する事も有り右に左に走り回っている。正直いくら俺でも魔力の補充のし過ぎできつくなってきた。外で壁際にもたれ掛り此方を眺めている魔術師が怨めしい。なんで外かつて？怪我もしてないし治癒も出来ない奴がこの野戦病院みたいな大騒ぎの中に座って待ってるのがむか々……邪魔だったから外に出てもらったのさ。

俺も結構テンションが可笑しな事になってるし限界に近いかも？自分でそんな事を考えて居るとドタバタと何人かの他の町の神官と緊急物資を持った商人達が入ってくる。やはり予想通り何人かの顔ぶれが戻って来ていない。ふふふ。火事場泥棒だけして働かないとか許さん！！まあ今回手を俺は下さないけどね？

俺達は増援の神官たちに中央を任せると町の巡回と生存者の確認の作業を行っている。大きな港町だけあり、市民登録は義務化されており何処の土地が誰の物かと合わせて明確に書かれている。この町の領主は相当な名君だったのが覗える仕事内容だが、当然ながら良い奴つてのは長生きしない。この津波の際に少しでも被害を抑えるために町に何人かの魔術師と一緒に彼は結界を張りその全員と魔力を使いきって息絶えた。復興のほう为名君と呼ばれる人間の出番だと思っただけだね？まあこの規模の津波で意外と生存者が多いのはそういう事だったのかと彼の行動には納得できた。普通なら木造の家が残るなんて考えられない規模の大津波だったから。そんな事

をしながら私達は各番地を回り生存者、呆然と座り込んでる人や家のあつた場所を掘り起こしてる人や泣き崩れて死体を抱きしめてる人それに大声を出しながら誰かの名前を呼んでる人に声を掛ける。

「貴方の名前教えていただけますか？あと出来れば構いませんが亡くなった方が判るようでしたお名前教えていただけますか？」

と尋ねるとやつ当たりのように俺に掴み掛かつて来る人も多かったが問答無用で殴って置いた。殴る事より後悔して殴られたいと思う人が大半だろうからね？まあそんな騒ぎを起こしながら名前を確認して各番地の真ん中ぐらいに張り紙を張っておく「市民登録の再確認行つて居ます。まだ行なっていない人は城の方へ一度ご確認ください。」そう書かれた紙を片手に俺の後ろに居るのは魔術師だ。因みにその張り紙は歩きながら書いて貼り付けて貰つてる。相変わらず少し無茶な注文したのに肅々と実行しやがる。才能の塊つてやつだな……

そんな事を繰り返すと私達はある半壊した店の前を通り過ぎようとしたその時ふつと魔術師の視線が逸れた。ココか！俺は口元に笑みが出るのを押える未だ笑みを見せるのは早い。そして店の中では誰かが動いている気配がする。俺は目的地を店の中に変えて歩き出す。

レディース&ジェントルメンようこそいらつしやいました。

私はこの舞台の脚本家であり勇者と呼ばれる主人公。メインキャラクター

ここに当舞台の開幕の宣言をさせて頂きましょう。

さあ幕は上がる。喜劇と悲劇と惨劇の始まりだ。

人が消える時（臨）（後書き）

旋光の輪舞^{ゲーム}のセリフと「異世界の生き方」のミックス

ようはレディスー&ジェントルメンと言わせたかっただけ。

ネタ元

レディスー&ジェントルメン これが最後のカーテンコール♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7647j/>

これが正しき英雄譚

2010年10月10日08時08分発行